

# 使いにくいギアス

壬生咲夜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

正月休みで実家に帰った際にふと思いついた小ネタです。  
短いです。

# 目次

倉庫でギアス	1
検証でギアス	5
熱血男にギアス	9



# 倉庫でギアス

〈初発動編〉

「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが命ずる。お前たちは……死ね!!」

赤い鳥が右眼から羽ばたき、倉庫に居た親衛隊全員に異能の力がかかった。

……そう、かかったのだが――

「……おかしい何故、いくら待てども命令通りに死なない!? 薄らとだが脳裏に浮かんだのは命令系統の異能の筈。まさか、発動に条件があるのか? 距離か? 人数か? 時間か?」

「あ……」

「っ!? な、なんだ」

「どのように死ねばいいでしょうか?」

ルルーシユは絶句し、まさかと思いつつも一度命令しなおした。

「……お前たちの持つてゐる銃を眉間に突きつけて自殺するなり、それが無理ならお互いに撃ち合えばいいだろう」

「「「「Yes, your highness!!!」」」」

目の前の親衛隊達が息絶えたことで今度こそ確信した。

与えられた異能——ギアスは命令を絶対にこなす。言わば絶対遵守のギアス。

ただし、「具体的に言わないと実行されない」というオプション付き

「七面倒臭いわ!!!」

本日——いや、今月最大級の心からの叫びだった。

〈ヴィレッタ編〉

ルルーシユの心の叫びを拾ったのか倉庫の壁を打ち破ってきた1機のナイトメアフレーム。

逃げる為にも再びギアスを発動し、ちゃんと「具体的に命じた」にも関わらず一向に効果が現れない。

「(つどういう事だ!? 回数制限付きか? インターバルか? それとも距離か? 或いは機械越しはNGなのか?)」

内心パニック状態に陥るルルーシユだが、咄嗟に「自分は貴族の子です。興味本位で来たら巻き込まれました。Help me!!」と巻き込まれた時の事を考えて置いたパターンを口ずさんでいた。

すると、それを信じたのか機体から降りてくるパイロットの女性軍人。

「（これはチャンスだ!! 頼む距離か肉眼かであつてくれ!!）」

やはり警戒しているのか片手に銃を持ちゆつくりと近づいてくる女軍人。

「（焦るな俺、さっきの親衛隊との距離を思い出せ!! そう、後10歩、8歩、6歩……）」  
「頭の後ろで手を組み、ゆつくりと後ろを——」

「（今だ!!）今すぐ寄せ、お前のナイトメア!!」

「——……解つた。大事に使え」

女軍人から了承を得た。

つまり、今度こそギアスがちゃんと発動し女軍人にかかったのだ。

この事にルルーシユは一か八かの賭けが当たつたと歓喜した。

それはもうキャラを打ち壊して踊りそうなくらいにだ。

だが、焦るあまり重要な事を失念していた。

「つパスワードを聞くの忘れたあああああああ!!!」

ナイトメアはキーとパスワードが揃つて初めて動かせる。

本来なら「ナイトメアに乗りたいたいから鍵ちょうだい♪ あとパスワードも教えて！」と聞く筈だったが、焦るあまりその事を失念してしまつたのだ。

キーは意識が無いであろう内に奪えばいい、だがパスワードは解らない。

さっきの親衛隊と違って既に女軍人が了承していることから命令変更や追加は出来ないであろう。

「(なんて使い勝手の悪いギアスだ!!!)」

その後、意識を取り戻すと面倒なのでその前にそらの石で女軍人の後頭部を殴って気絶させ、同じような手口で別の人からナイトメアを奪いましたとさ。

## 検証でギアス

東京租界でのテロ事件から暫く——ん、あの後どうしたかだと？

概ね原作通りだ。詳しくは原作をみる!!　…何を言っているんだ俺は？

兎も角、テロ事件から暫くたち、その間俺はこの異能の力「ギアス」を研究していた。テロ事件中にも何度か使用したが、思った通りにいかなかったりしたからだ。

とある絵画が趣味な皇族に「話せ・教えろ」といった命令を出したらその場限りだった。

だが、とある赤毛の猫かぶりに「俺の質問に必ず正直に答えろ」と命じ、数日後に何気ない質問をしたら正直に返されたのだ。

これに驚いて試しに通りすがりの女性徒に「毎日必ず学校の屋上の壁に印を付けろ」と命じてみた。その際「どんな印？」と聞き返されたが飛ばさせて貰う。

結果、女性徒は毎日必ず屋上に行つて指示した印を付けるようになった。

どんな時でもだ。

ある強風が吹いた日、休み時間に人知れず消えさつた彼女は髪や服装をボサボサにし



いや、ホント悪い事をした。

今思うと赤毛の——カレンにかけた「俺の質問に必ず正直に答えろ」もかなり危ないな。

あの時は何気ない質問だったから良かったものの、ふとした事でカレンがハーフでテロに参加している事を喋らせてしまうかもしれない。

カレンと会話をする時は気を付けよう。

他にはサボりの一件を延々とグチグチ言ってくる教師に「阿波踊り」を踊れと命じたところ「アワオドリとは何だ?」と返された。

どうやらギアスをかけた相手が知らない事は出来ないうえに一度命令を出したら変えられないらしい。

しつこく聞いてくる教師に仕方なく阿波踊りを披露しなければならず非情に屈辱的だった。

憂さ晴らしにニコ●コ動画に踊ってみたで投稿した俺は悪くない。

そんな実験を繰り返すこと十数日。

色々と試した結果が以下の通りだ。

- ◆ 直接相手の眼を見なければならぬが眼鏡程度だったら問題無し
- ◆ 有効距離は個人差があり、相手の視力に左右される
- ◆ ギアスの発動前後、及び発動中は何も覚えていない
- ◆ ギアスは一人につき一度きり
- ◆ 命令は具体的にしないといけない
- ◆ 具体的な内容によって命令が持続する
- ◆ 絶対や必ずを付けるとヤバい
- ◆ 知らない事は出来ないし、どうすればいいか聞いてくる
- ◆ 命令の変更は不可

……改めて言わせてもらおう。

使いづらいわ!!!

## 熱血男にギアス

今から数週間前の事だ。

ちよつとしたミスで怪しまれていたカレンを如何にか誤魔化すことに成功。

その際、産まれたままの姿をがんばく——じゃなくて拝見してしまったが割合させてもらう。

カレンの久々の復帰&生徒会への歓迎会を開いていたらTVでクロヴィスを殺害した犯人を捕えたと報じられた。

犯人の名は枢木スザク。

俺の、友達だ。

スザクを助ける為に民衆の前で自らを犯人だと名乗リスザクを引き渡させ<sup>ジェレミア・ゴットバルト</sup>護送を務める責任者にギアスで操り疑惑の眼を向けさせているうちに華麗に撤退。

「反ブリタニアを掲げるカリスマヒーロー爆誕!! その名はゼロ」と宣伝するつもりだったが、どう考えてもムリポ。

まずギアスの有効範囲は相手の視力によってまちまちだ。

軍のサーバーにアクセスしジェレミアの視力は両目とも良い方だとわかったが、それでも憶測で試して失敗しスザク諸共処刑されては身も蓋も無い。

限られた時間は極僅かで使える駒は殆どない。

どうすれば、どうすればスザクを助けられる……。

気付けば俺は授業をボイコットし街をふらふらと歩き

「ル、ルルーシユ様ああああああああああ!!!」

「ほあああああああああ!!?!」

件のジェレミア・ゴットバルトに捕まった。

想像してほしい。

180はあるガツシリとした体格で30手間の野郎が自分の腰に抱きついて大泣きしている様を

正直、鬱陶しいし、周りから奇異な目で見られて居たたまれない。

「人違いだ!」と言えば「いいえ、私が見間違う筈がありません!!」と返され、「いいから放せ!!」と言えば「絶対に離しません!!」と返される。

終いには「貴方は、貴方だけは!!」と言い始め、政庁や軍事施設に連れ去ろうとするものだから

「っ、俺の話聞いて！」

つい、ギアスを使っちゃった♪

………なにも、言わないでくれ。

自分で手札と策を減らしてどうするんだとか言わないでくれ…

使ってしまったモノは仕方がない。

「話を聞け」という命令に何処まで答えてくれるかは解らないが聞きだせるだけの

情報を全て話してもらい、あとは新宿の方々同様に後頭部を殴って忘れて貰おう。

で、場所を移して「俺の話しを聞いて」貰った結果だが…

ジェレミアは母が死んだ事件の日護衛担当を務めていたらしく、俺とも直接会って  
た

初任務&憧れの人の護衛にw k t kしてたらコーネリアから帰れと言われた。

そのコーネリアも母上から人払いを頼まれたらしい。

マリアンヌ襲撃事件で母上死亡。

せめて俺たちだけでもと日本に行こうとしたら止められたうえに、死亡したと報じら  
れた。

後悔先に立たず、『我が命に代えても皇族を守る』と誓い、純血派を結成。

……なんか重要なイベントを幾つかスキップした気がしなくもないが、まあ良いだろう。

当時の事を知れたのは大きい。

人払いの理由。十中八九母上は誰かと秘密裏に会い、その人物に殺されたのだろう。

ならば、次はその人物を何と少しでもつきとめてやる!!

その後、俺たちを保護すると言い張るジェレミアにじっくりゆっくりと俺の話聞いてもらい、「力及ばず申し訳ありません」と涙する彼の後頭部をその辺の石で殴打し撤回。

正直、今でも母の事を敬愛し慕っていてくれる事、俺たちの事を保護すると言ってくれた事は凄く嬉しかった。

だからこそ、俺の復讐に彼を付き合わせたくない。

ジェレミアもそれを何となく察して、大人しく殴られるのを待っていてくれたのだろう。

彼はきつと俺たちの生存を黙っていてくれる。

何故だかそんな気がした。

ところで、何か忘れて  
いる気がするんだが……